

現れの相対性について

高村 夏輝 (Natsuki TAKAMURA)

東京大学大学院 総合文化研究科

円い硬貨が真上からは円く、斜めからは楕円に見えているとする。このときの「円さ」「楕円である」という内容を「現象的特徴」と呼ぶことにしよう。現象的特徴は経験の志向的特徴であるように見え、かつ例化された性質であるように思われる。しかしもし本当にそうなのだとしたら、一つの硬貨が両立しない性質を同時に持つことになってしまう。この問題は伝統的に「現れの相対性」もしくは「現われの対立」と呼ばれてきた。

現象的特徴は経験の内在的状态であって志向的特徴ではないという主張に対しては、いわゆる「経験の透明性」という論点から反対される。すなわち一階の経験はもちろん、経験についての内観的意識によっても、われわれが注意の対象にできるのは外界の対象のあり方に他ならないという論点である。また現象的特徴が例化した性質ではなく表象内容なのだとしても、それが正しい表象内容だとみなす限り同様の問題は残る。

今回の発表では、以上の問題に対する一つの解決策を取り上げ、その妥当性を検討したい。その解決策とは、現象的特徴は対象が持つ関係的性質によって充足される表象内容であるとする見解である。

シドニー・シューメイカーによれば、対象は知覚されているときには、特定の内在的特徴を持つ経験を惹き起こしているという関係的性質を持っており、現象的特徴とはそうした現象的性質についての表象内容である。例えば円い硬貨が円く見えている経験の内在的特徴を **Q1**、楕円に見えている経験の内在的特徴を **Q2** とすると、「円く見えている」と「楕円に見えている」という現象的特徴はそれぞれ、硬貨が「**Q1** を持つ経験を惹き起こしている」と「**Q2** を持つ経験を惹き起こしている」という性質を持つことを表象しているとするのである。これら二つの性質は両立不可能ではない。よって、現象的特徴を経験の志向的特徴であり、正しい表象内容であるとする事ができる。

この立場に対してまず思い浮かぶ疑問は、現象的特徴は関係的であるようには見えないということである。円さであれ楕円であれ、一項の性質として経験されると思われる。もし現象的特徴は一項であるが現象的性質は関係的だとするのであれば、現象的特徴は偽の表象内容ということになるのではないか。この疑問に対してシューメイカーは、「**x** は **y** の右にある」や「**x** は重い」といった性質の例を挙げ、これらはそれぞれ三項関係、二項関係であるのに、二項関係、一項性質だと思われているのであり、性質が何項であるかはその経験の与えられ方から判明するものではないと主張する。しかし「右にある」と「重い」はそれぞれ二項関係と一項性質と考えるべきであり、実在と現れ方の間に項数の違いはない。これらの性質はなんら疑問の余地なく正しく表象されているのであって、現象的性質と現象的特徴の項数のズレを正当化しうるも

のではない。

ではシューメイカーの主張に反して、現象的特徴が関係構造を備えているとするとどうか。経験の現象的特徴は、非概念的な表象内容である。ある内容を非概念的にしているのは、その内容を特定する概念を経験主体が所有していないということに他ならず、経験は関係構造を備えた事実を非概念的に表象できるし、対象が関係的性質を持つものとして非概念的に表象することがありうる。

しかしこれが可能なのは、関係項がすべて知覚されている場合である。例えば、**a**が知覚されていないのに、「**a**よりも大きい」という関係的性質をもつ物として**b**を表象しているとする。するとこの**b**についての表象内容が構造化されており、**a**を表象する内容を含むとすると、その**a**についての表象は、**a**が主体の経験を現に惹き起こしていないときにも主体が所有する表象であることになる。つまり「**b**は**a**よりも大きい」という脈絡からは独立に**a**を表象でき、この表象を「**b**は**y**よりも大きい」という関係的述語以外の表象と結合することができることになる。これは**a**についての表象は概念的であるということにほかならない。したがって関係項が知覚されていないにもかかわらず、関係的性質をもつ物として何かを表象することは概念的表象である。非概念的に関係的性質を表象するには、その関係項がすべて知覚されていなければならないのである。

だとすると、現象的特徴が関係構造を持つ非概念的内容だとすることは、シューメイカーの立場に内的な不整合をうむことになる。現象的特徴が関係構造を持つ、すなわち経験の内在的特徴 **Q1** や **Q2** の表象内容が現象的特徴の構成要素になっていることから、知覚対象だけでなく、**Q1** や **Q2** もまた知覚的に意識されていると言えることになり、「経験の透明性」という論点に反することになるからである。

したがって経験の透明性を支持するのであれば、現象的特徴は関係構造を持っていてはならない。しかるに、現象的性質が関係的ならば、現象的特徴もまた関係的であるべきである。よってシューメイカーの立場は整合的なものではない。かくして、現象的性質を「しかじかの内在的特徴を持つ経験を惹き起こしている」という関係的性質とし、現象的特徴をそれに関する表象内容とする見解は退けられることになる。